

●花ごう岩の眺め絶景

高千穂鉄道（TR）の「槇峰駅」から、綱ノ瀬川に沿って十六キほど上ると、鹿川（ししがわ）に着く。標高約五百五十メートル。川底には岩盤が露出、夏は水流に乗って岩場を滑る天然の滑り台もあり、涼を楽しむ人々が訪れる。

一九八七（昭和六十二）年まで、営林署の鹿川事業所があり、従業員も四十―五十人いて活気があった。広大な国有林を持ち、五二（同二十七）年、日之影町の八戸から森林軌道が開通し、木材を搬出した。住民はトロッコを引く機関車を「エンジン」と呼んで喜んだ。この軌道は当時の国鉄日之影線に連絡、村に大きな便宜を与えた。

やがて道路の改修が進み、昭和三十年代後半から、木材搬出はトラック輸送となり、住民の交通手段も自家用車になった。営林署の事業所閉鎖後、村は大きく変わった。当時、百戸、住

民数も五百人を超えていたのが、現在は四十四戸、百二十八人である。

村は、江戸時代初期の寛永三（一六二六）年から掘られていたという大吹鉦山への中継地としても栄えていたという。鹿川観音堂に伝わる鱒口には「寛文七年鉦山住人高見三郎」の銘文がある。寛文七年は一六六七年である。この時代に延岡に至る通路は、北方町の今村を經由して祝子川に出ていた。

鹿川の入り口に名勝・比叡山、矢筈岳がそびえている。綱ノ瀬川をはざんで両岸にそそり立つ花ごう岩の絶壁は、息をのんで眺めるほどの絶景である。

右岸が矢筈岳（六五八メートル）、左岸が比叡山（七六〇メートル）。一九三九（昭和十四）年、国指定名勝となった。びょうぶのようにそそり立つ岩壁は、ロッククライミングの名所。練習も兼ねて登山

者たちが各地から訪れる。

地質学では、環状花ごう岩脈と呼ばれる岩山。ここからさらに奥にある大崩山（一、六四三メートル）という巨大な山塊ができた時代、その周囲に生じた割れ目に、マグマに押された岩体がせりあがって一連の岩山が造られたという。この系列の山は丹助山、行藤山、可愛岳と東方に約四十キにわたって並ぶ。

鹿川は綱ノ瀬川をはざんで北方町と日之影町に分かれている。北方町側には町営キャンプ場と民宿が一軒、日之影町側にも民宿が一軒ある。冷涼な気候を利用したミニトマトの生産、肉用和牛の飼育も行われ、広大な山林に植林も続けられている。十二月には伝統の夜神楽もある。

甲斐亮典



鹿川溪谷。夏はここで岩場滑りが楽しめる